

Kwansei Gakuin University Research Center for Christianity and Culture

RCC Newsletter

発行：関西学院大学 キリスト教と文化研究センター

https://www.kwansei.ac.jp/c_rcc/ TEL:0798-54-6019

研究プロジェクト報告

ことばの力

—キリスト教の視点から—

ことばの意味が著しく希薄化する今日、本プロジェクトはキリスト教の歴史と現在との関連において希望を分かち合うことのできることばの意味の探求を意図しています。

昨年度は「浮動する言葉—ホスピスにおける『スピリチュアル』の使い方」(Timothy O. Benedict 社会学部助教)、『みことば』という『ことば—キリスト教における『ことば』理解に関する予備的考察」(加納和寛社会学部准教授)、「中世後期ヨーロッパにおける説教と教説—教皇ヨハネス二十二世と至福直観論争」(赤江雄一慶應義塾大学文学部准教授)の主題で研究会を行いました。

今年度はカトリックの典礼(宮越俊光氏、日本カトリック典礼委員会委員)、R・W・エマソンと内村鑑三(赤江達也社会学部教授)、オリゲネス(梶原直美教育学部教授)、D・ボンヘッファー(橋本祐樹神学部助教)との関連で研究会を進める予定です。

(打樋 啓史)

エコロジカル聖書解釈

昨年、本プロジェクトは、隔月でエコロジカル聖書解釈やエコフェミニズムに関する研究会を行いました。

今年是一年目の成果を担保にして、(一)エコフェミニズム神学から聖書を解釈する視点を明らかにし、(二)エコロジカル聖書解釈において頻繁に取り上げられる聖書箇所を分析します。

(一)エコフェミニズム神学に関しては、リユース、ゲバラ、マクフェイグを軸に分析を進め、日本をコンテクストにした環境神学の構築の可能性を示します。次に(二)世界キリスト教協議会がすすめている新しい教会暦「創造の季節」に対応した聖書日課の聖書箇所を具体的に上げて検討します。これらの聖書テキストに關してはすでに先行研究が存在するものが多いので、その批判的検討を行い、独自の展開を付け加えます。なお、本研究はプロジェクト終了時まで、エコロジカル聖書解釈ガイドブックを作成することを目指します。

(大宮 有博)

今日の日本社会におけるキリスト教大学の存在意義と使命

本プロジェクトでは、キリスト教主義大学がどのようにキリスト教主義を展開し、その教育に影響を与えているのか、その取り組みの実情と課題を明らかにします。各大学は、授業や授業以外の課外活動を通して、どのような形でキリスト教を学生や教職員へ発信し、その教育内容に反映させているのでしょうか。それぞれの大学の取り組みを明らかにします。そして、その取り組みの意義と効果、課題を検討します。

具体的に本プロジェクトでは、昨年の春学期には青山学院大学宗教部長の塩谷直也氏を、秋学期には立教大学文学部長の西原廉太氏をお招きしました。今年度は秋学期に晴佐久昌英氏(カトリック東京教区司祭)をお招きする予定です。また、本学の発行物に掲載されたキリスト教に関する発言を抜粋した『建学の精神考』の出版も予定しています。

(東 よしみ)

映画とキリスト教

本プロジェクトは現代における一般文化としての映画に含まれるキリスト教的な要素を神学的な観点から分析し、批評を加え、最終的には映画の神学的総覧を可能にすることを意図しています。今現在、邦語で映画に含まれるキリスト教的な要素を指摘する映画批評を目にするのは珍しくありませんが、現代の映画を網羅的に取り上げて神学の専門的観点から評するものは類を見ません。

昨年度は映画のリスト化を行い、それを基に一一三作品を選定しました。現在は総勢三三名の執筆予定者によって映画の分析が順次進められています。次頁にも示される通り、キリスト教に関わる本学の教員のみならず本学出身の教育関係者によって幅広い仕方で取り組まれている点もこのプロジェクトの特徴です。今後の取り組みの一つとして著名な映画製作の関係者を招いた講演会や対談等についても検討しています。

(加納 和寛)



「映画とキリスト教」プロジェクト座談会

加納 和寛

「映画とキリスト教」プロジェクトは、一九九〇年代以降に公開されたキリスト教関係映画一〇〇作品あまりを解説する書籍の刊行を目指しています。学内外の三三名が執筆しますが、そのうちすでに映画解説文をいくつか書き終えられた家山華子氏と柳川真太郎氏（いずれも本学大学院神学研究科出身）および本プロジェクト担当の加納（司会）の三名で座談会を行いました（緊急事態宣言中であつたため、Zoomにて実施）。

——お二人ともキリスト教教育に携わっておられますね。映画の用い方について教えていただけますか。



家山「わた
しは日本基
督教団三木
教会の牧師
をしつつ、

キリスト教主義高校の聖書科の非常勤講師をしています。授業の教材として映画を用いる用途は二つあります。一つは聖書の理解のためです。旧約聖書の創世記の物語や、イエス・キリストの生涯を描いた映画は役に立ちます。もう

一つは他者理解のためです。文化や環境が異なる外国や、障がいを持った方々のことを深く知るために映画を見せます」。



柳川「わた
しは日本基
督教団の教
務教師とし
て、キリ

スト教主義大学である名古屋学院大学のキリスト教センターという部署でキリスト教教育に携わっています。職員のため授業は担当しませんが、学内のさまざまな宗教活動に参加し、学生たちに関わっています。今後は、演劇部の学生にクリスマススペリエント（降誕劇）をやってもらう際に、キリスト教関係映画を活用したいと考えています」。

——すでに解説文を書き終えられた映画についてお話しただけですか。

家山「『ベン・イズ・バック』（二〇一八年・アメリカ）は薬物依存の一九歳の青年と、その母の葛藤の物語です。冒頭のクリスマスの場面で賛美歌「さやかに星はきらめき」の歌詞の一節「罪と偽りのもとに置かれていた世の人々

に、生きる価値があると知らしめるために」が紹介されます。薬物および組織や薬物仲間と手を切ることができずに周囲まで苦しみに巻き込む息子を決して見捨てず、いなくなつてもどこまでも追いかけてようとする母親は、聖書が説く、人間に対する忍耐強い愛を示す神を思わせます。神のイメージが、母親という女性に重ねられて解釈しうる点も重要であると思ひました」。

——最近の映画では、女性やアフリカ系の俳優がキリスト教の神を演じる例が増えましたね。かつて映画の中で神を演じるのはヨーロッパ系の男性俳優が当然でしたから、この映画もそうした「現代の神のイメージ」を表現しているものの一つといえるかもしれませんね。

柳川「『ジェイムズ聖地（エルサレム）へ行く』（二〇〇三年・イスラエル他）は、純朴なクリスチャンである南アフリカのズール族の青年ジェイムズが、巡礼目的でイスラエルにやってきたところから話が始まります。不法労働者と間違えられて収監されたジェイムズは見知らぬ人に助けられますが、その人は外国人を不法労働させて金儲けする人でした。いつしかジェイムズは金儲けに目覚めてしまい、お金と信仰を直結させて「繁栄の神学」と呼ばれる特定

のキリスト教思想に傾倒してしまっています。本来の目的であつたエルサレムへは最後までたどりつけません。不法労働が見つかって当局に逮捕され、国外追放される直前にエルサレムの前でようやく記念撮影ができたのですが、それは約束の地に入れなかつたモーセを思わせます。資本主義国イスラエルの商業主義的な実態が、聖書の言葉を用いて「乳と蜜の流れる地」と表現されているのも皮肉がきいていると思ひました」。

——「繁栄の神学」のように、一部のキリスト教で提唱されていて、も大部分のクリスチャンは知らない信仰実態が映画で取り上げられているのは興味深いですね。クリスチャンも学ぶことが多い映画だと思ひます。

柳川「日本では御利益主義的なクリスチャンはほとんど見かけないのですが、教会への貢献や献金への考え方はさまざまで、時に行き過ぎだと思ふようなあり方も見られます。この世とキリスト教の価値観の折り合いを、多角的に見直せる映画だと感じました」。

家山「二部の新宗教の影響なのか、日本では宗教が集金や人集めを前面に出すのが嫌われる傾向がありますよね。ところがむしろそれを積極的に行うキリスト教グループも世界には存在することを知らず機

——最後に、『映画とキリスト教』の利用方法などについて期待や提案があればお願いします。

家山「キリスト教主義学校でも、キリスト教を学ぶことに抵抗を感じる生徒がいたりします。そうした生徒にもキリスト教を身近に思ってもらえるツールになればと願っています」。

柳川「この本を用いる聖書科教師が、ただ授業で映画を見せて感想を書かせるだけでなく、「こんな見方も、あんな見方もできるよ。この本にはこう書いてあるけど、わたしはこう思うよ」というような、キリスト教関係映画のいろいろな見方を紹介する一助になればと思ひます」。

——お二人ともありがとうございました。

